

介護の力

仁生園 村上大

私が、特別養護老人施設で勤務し、深く考えた事柄の一つにターミナルケアがあります。就職後、勤務に慣れてきた頃にパーキンソン病の老年男性が入所されました。

少し変わったこだわりの強い、しかし意思の疎通があまり容易ではないその利用者様は、一生懸命に何かを訴え発語されているのですが、その頃私にはわかりませんでした。思い通りに効かない手足で一生懸命に棚の荷物を探そうと、ベッドから這いずり出てくることもあり、私にはどうすればいいのか分からず、介護が苦痛に感じる事も少なくありませんでした。

しかし、先輩介護士達は「だね、待っていてね」と、いとも簡単に訴えを理解しており、私は悔しくて仕方ありませんでした。そこで私は、その利用者様と先輩介護士のやり取りを、細かく観察するようにしました。

上手く伝わらず暴れる利用者様の手を取り「聞くよ、大丈夫。どうしましたか？」と声をかけ、安心していただくよう努め、様々な方法で小さなサインを拾って、意思の疎通を図るよう心がけました。素っ気なく、聞き過ごしてしまっていた自分を恥ずかしく思い、一生懸命に先輩介護士の真似をしてコミュニケーションを図りました。

ある日出勤すると「あなたを呼べて言ってるよ」と先輩介護士に言われ、その利用者様の所に行くと「どうも今日は伝わらなくて困っていた、あなたが居て良かった」と、仰いました。その一言を聞いた時、達成感とやりがいに満たされ、とても嬉しかった事を覚えています。

その利用者様は、以後も元気に過ごされていましたが、段階を踏んでターミナルとなり、自分の経験では初の順を追ったターミナルとなりました。

ここでも先輩介護士の経験に学びました。「耳は最後まで聴こえるからね、好きな音楽をかけてあげましょう」「終末期が近いと足が冷えるから温めてあげて」「巡視は様子だけじゃないよ、安心を提供するのも巡視だよ」書ききれないほどの、ここでしか学べないものを教えてもらいました。観察して考えて私には何ができるのかを必死に工夫し、「苦しい」と言われたら手を擦り、声を掛け、自分の発想の出来る限りを尽しました。

「わるいな」「ありがとう」そう話された後、ほどなくして私の日勤中に亡くなりました。

生活のお手伝いとしての介護から、大きな変化を私にもたらした経験でした。人の死を学び、想い、考える。深く寄り沿い関わっていくことは簡単な事ではありませんが、「介護をして、みてあげている、してあげている」から「人の命という貴重な経験をさせて頂いている」に変わった瞬間でした。同時に、私がこの仕事にやりがいと魅力を感じ、強い想いを持って人生の先輩達の終期を精一杯その人らしく迎えられるように誠心誠意努めていこうと思えた時でした。